

ヨハネ 8:1-11

8:1 (そのとき) イエスはオリーブ山へ行かれた。

8:2 朝早く、再び神殿の境内に入られると、民衆が皆、御自分のところにやって来たので、座って教え始められた。

8:3 そこへ、律法学者たちやファリサイ派の人々が、姦通の現場で捕らえられた女を連れて来て、真ん中に立たせ、

8:4 イエスに言った。「先生、この女は姦通をしているときに捕まりました。

8:5 こういう女は石で打ち殺せと、モーセは律法の中で命じています。ところで、あなたはどうかお考えになりますか。」

8:6 イエスを試して、訴える口実を得るために、こう言ったのである。イエスはかがみ込み、指で地面に何か書き始められた。

8:7 しかし、彼らがしつこく問い続けるので、イエスは身を起こして言われた。「あなたたちの中で罪を犯したことの無い者が、まず、この女に石を投げなさい。」

8:8 そしてまた、身をかがめて地面に書き続けられた。

8:9 これを聞いた者は、年長者から始まって、一人また一人と、立ち去ってしまい、イエスひとりと、真ん中にいた女が残った。

8:10 イエスは、身を起こして言われた。「婦人よ、あの人たちはどこにいるのか。だれもあなたを罪に定めなかったの

か。」8:11 女が、「主よ、だれも」と言うと、イエスは言われた。「わたしもあなたを罪に定めない。行きなさい。これからは、もう罪を犯してはならない。」

<はじめに>

3週連続で「赦し」をテーマに福音を学んできました。最初はルカ13章から「実をつけないイチジク」のたとえ、先週はルカ15章から「放蕩息子と兄」そして今週がヨハネ8章「姦通の女」です。

- ①「イチジク」では悔い改めなければ裁かれる。悔い改めによる赦しという倫理、教え。
- ②「放蕩息子」では帰ってくれば赦されるとされ帰還による赦し、またそれ受け入れない者は裁かれる、兄に対する批判となっていました。
- ③「姦通の女」では過去は問わない、これからは罪を犯すなという励ましとなっています。

だんだんと「赦し」のハードルが低くなってきます、今週は過去の罪は裁かれない=赦され、これからの生き方を改めなさいとなっている。女が一言も弁明していないことに注目してください。

ここまで言い切ってしまうと、罪に対する罰がない、さすがに教會的にまずいと思ったのかきょうの福音箇所は、カッコでくくられています。カッコの意味は、もともとはこの話はありませんでした。あとから追加されたものです。だからふるい写本にはありません、新しい福音書の写本にだけ掲載されています、という説明です。

じゃあ、もともとはどの福音書に含まれていたんだ、という論議もされていて、ルカの21章38節の前にあったのだろうというところで今のところは落ち着いているようです。

<あらすじ>

イエスが神殿で教えていると律法学者たちが姦通女をつれてきて、律法では姦通罪は石打ちだけど、先生ならどうすると迫ります。

どうして女だけで男がないのか、どうして裁判所ではなく神殿につれてくるのか、つつこみどころはありますが、福音は、イエスを試して、訴える口実づくりのためだとネタばらしをしています。イエスはかがみこんで地面になにか書き出しますが、しつこく問い詰めるので「罪なきものより石投げよ」といってまたしゃがみこむ。すると騒ぎをおこした張本人たちは逃げちゃった。一人残った女にイエスは「もう罪をおかすな」と説教するというはなしです。

<石を投げよ>

わたしは今回読み直すまで、このエピソードはイエスの一言で石打を止めた、さすがはイエス、すごい一言をいうものだと思っていました。

よく読んでみれば、もともとこれは計略で、イエスを罠に嵌めるため、と書いてあります。律法学者たちも本気で石打刑にするつもりはなかったのでしょうか。

ひよっとすると、この女も計略の一部、律法学者たちとグル

だったかもしれません。

かりに、そこまで読み込めるとすると「わたしもあなたを罪にさだめない」というイエスの一言は女だけに告げられたのではなくになります。

女もグルだったとすると、罪に定めないのは女も含む、計略を企んだ律法学者たち一味への言葉になります。

イエスの赦しに「悔い改め」は必要とされていないことを先週、先々週と学んできました。

「罪なきものから石投げよ」イエスはこのことばに深い意味をこめました。

石を投げるものは、罪なき者で律法にかなう者です。また石を投げない者は自分に罪のあることを認めた者、悔い改めに関係なく、過去は問わず赦された者となります。イエスの福音は、どっちにころんでも罪を赦された者としているのです。イエスの説く「赦し」はそこまで突き抜けてしまっているように思えます。

イエスは強きをくじき、弱きを助けるスーパーヒーローではありません。

地面になにか書いている、しゃがんで書いているイエスの姿、

そしてしゃがみこんだまま「罪なき者より石投げよ」といい、一人去り、二人去り、ついには女と二人だけになるイエス。そして「わたしも罪に定めない」といい、女をさらせ、独りになるイエス。ここにイエスの孤独が浮かび上がります。すべての人の罪を背負うイエスがいます。

イエスをここまで追い詰めることになったこの女の行く末に、人びとは希望を抱きます。悪女であるが聖女であり、穢れているが清い女、この背反のイメージを持つ女性として、のちの多くの人の心の中に宿っています。マグダラのマリア、ベタニアの香油女、サマリアの女、そしてこの姦通の女のイメージが人びとの心に刻まれ、励ましと希望になってきました。

「わたしもあなたを罪に定めない」

このイエスの一言が多くの人を励まし、救いの福音となったのです。主のめぐみがあなたの上にも豊かに注がれますように。